

ジャック・ロンドンの心霊ホラー小説を読む

——唯物主義作家が恐れたこと——

横山孝一

はじめに

ジャック・ロンドン（1876-1916）は約200編もの短編小説を残している。「大ざっぱな分け方をしてみても、〈極北もの〉、〈南海もの〉、〈歴史的空想作品〉、そして〈社会派SFもの〉等々といった、ひじょうに多様な短篇群があって、それぞれに異彩を放っている¹⁾」。さらに細かく分ければ、〈ボクシング小説〉〈残酷物語〉のような今日でもじゅうぶんに楽しめるジャンルが発見できる²⁾。本稿では、あまり知られていない〈心霊ホラー〉ジャンルの作品に注目してみたい。ジャック・ロンドンは、死後の超常現象を扱った恐ろしい短編小説を3編書いている。すなわち、「幽霊なんて信じるか！」（“Who Believes in Ghost!” 1895）、「こっくり板」（“Planchette,” 1906）、「死後も消えぬ姿」（“The Eternity of Forms,” 1911）である³⁾。唯物主義を標榜していたロンドンがこれらの〈心霊もの〉を書いた背景について中田幸子はこう述べている。「彼は、両親の直接・間接の影響の故に、オカルティズム（神秘主義）に無関心ではなかったと思われる。生涯認め合うことがなかった実父は占星術を講じ、母は霊媒を職業としていた⁴⁾」。関心も、素材も、さらには書く力もあったわけだ。しかし、これから紹介する作品の恐怖が幽霊の存在に根ざしていることを考えると、謎は残る。唯物主義者のロンドンがなぜ幽霊を恐れたのか？ 以下、発表順に各作品の恐怖を吟味して、ジャック・ロンドンの心霊ホラー小説の現代性を再評価しつつ、彼の内面と直結した「謎」の答えを探ることにしよう。

1. 「幽霊なんて信じるか！」（1895）——憑依する霊——

“Who Believes in Ghosts!”——疑問符ではなく感嘆符がつく。この題名には「だれも幽霊など信じはしない」という反語的な意味が込められ、幽霊の存在に懐疑的な科学の時代が背景になっている。当然、主人公のダモンは「まさか、幽霊の存在を本当に信じてるって言う気じゃないだろ。そんな考えはバカげている⁵⁾」(19)と切り捨てようとするが、ジョージは「でも、僕は幽霊の存在を本気で信じているんだ」(19)と挑む。「冷徹な科学が支配する『今日』」(19)でも死後に魂が戻ってくると信じる者が多い事実はダモンも否定できず、「未知のもの」(20)を解明したいという公平な立場から、ダモンは友人のピュティアスと幽霊屋敷で一夜を過ごすことになる。

幽霊屋敷を扱った典型的な怪談の形をとっているものの、ジャック・ロンドンは、平行して「猫狩り」を描くことで見事な独創性を発揮している。外で待機するジョージの友人フレッドは、猫の解剖に夢中で、妹ドーラのペットまで殺し、ウサギの骨格とだまして彼女に愛猫の遺骨を見せたと自慢しているという。いわゆるブラックユーモアである⁶⁾。ここで笑ってはドーラが気の毒だが、つづく会話では心置きなく笑うことができよう。

「ちくしょう！」

「猫のことか？」

「いや、フレッドのやつさ。かわいそうなドーラ。かわいがっていた猫をなくして、さぞ悲しんだにちがいない」

「フレッドは鞭で打たれるべきだな」

「いいや、解剖されちまえばいいんだ。それから遺族に、ヒトと類人猿をつなぐ『失われた環』ですよって差し出してやればいい。ドーラが自分の猫とわからなかったように、フレッドの骨とはわかりゃしないさ」(21)

女性を悲しませた悪人がブラックユーモアの対象となり、「人間の生体解剖」で残酷さも増すが、読者は笑わずにはいられない。ジャック・ロンドンの小説家としての力量が感じられる。

この作品は、ロンドンが高校生のときにオークランド・ハイスクールの『イージス』に発表した⁷⁾。高校生とは言っても、他の生徒より年上の19歳で、船乗りとして日本沿岸へ航海したり、黄麻工場や発電所でつらい労働を経験したり、放浪罪で服役するなどすでに人生経験も豊富だった。「幽霊なんて信じるか!」を読むと、プロデビュー前ながらかなりのテクニックをもっていたことがわかる。たくさん本を読んでいた成果だろう⁸⁾。引用した会話がピュティアスの次のセリフにつながっていることに注目したい。「猫に魂があるとしたら、ほくはフレッドみたいに夜中に猫狩りに出るなんてまねは怖くてできないな。ジョージ、猫には魂があるのか?」(21)。笑いがこの一言で恐怖に変わる。暗示されている殺した猫の呪いは、エドガー・アラン・ポーの一度読んだらその恐怖が忘れられない「黒猫」(“The Black Cat,” 1843)を想起させる。愛猫ブルトーを吊るし首にして殺したあと、主人公は火事で家と財産を失い、猫の幽霊の出現によって、妻を殺し、死刑を待つ身となる⁹⁾。ジャック・ロンドンが「千度の死」(“A Thousand Deaths,” 1897)で原稿料を稼ぎ「下積み生活脱出の一步となった」雑誌名は『黒猫』(The Black Cat)¹⁰⁾だった。作家として名をあげてからは、ポーの墓参にも行っている¹¹⁾。ロンドンとポーは性格を含めさまざまな点で驚くほど似ており、文学的にも『赤死病』(The Scarlet Plague, 1915)がポーの「赤死病の仮面」(“The Masque of the Red Death,” 1842)の影響を受けていることが指摘されている¹²⁾。ポーは、心霊ホラー・ジャンルの巨匠だ¹³⁾。猫狩りはポーへのオマージュで、早くも出発点で、ジャック・ロンドンはポーの物語の恐怖をしっかりと吸収していたのではないか。

幽霊屋敷に送り出すジョージの警告もうまく書けている。——幽霊が閉まっているドアを開け、明かりを消し、うめき声を上げるのはまだましなほうで、からだを持ち上げて床や壁めがけて「フットボールのように」(22)投げつけるかもしれない。極度の恐怖のために気が狂い、「わけのわからぬことを口走る白痴」(22)になってしまうかもしれない。「この邪悪な霊は、きみたち

の鼓膜を破裂させ、目玉を焼き、声帯を破壊し、味覚と嗅覚さえも損ね、全身の神経を麻痺させることだってできるんだ」(22)。——表現が具体的で、生々しい現実感がある。狂人になるか不具者になるか、どちらも恐ろしいが、さらに怖いことがある。「キリストの時代にあったように、悪霊がきみたちの体を棲家とし、内側から苦しめるかもしれない」(22)。以上の脅し文句を読むと、『エクソシスト』(The Exorcist, 1973)、『ポルターガイスト』(Poltergeist, 1982)といったホラー映画の名場面が思い浮かぶ¹⁴⁾。つまり、ジョージのせりふには幽霊のあらゆる脅威が凝集されているのだ。

この前置きによって、「すべてが昔風の」(22)典型的幽霊屋敷も現実味を帯びてくる。足を踏み入れたふたりは「鉛の重しのように」(23)のしかかってくる沈黙の中、ジョージの言葉を出し、青ざめ、額から冷たい汗が流れだす。「悪夢の中のように、ふたりは大声で叫びたかった」(23)という表現が注目に値する。夢の中で味わう恐怖は尋常ではない。怖くても声が出せないのは悪夢の特徴だ。ホラー小説の恐怖は悪夢に根ざす¹⁵⁾。そのことにジャック・ロンドンも気づいていたのだ。

ここで読者の緊張をいったん解いてしまうところがジャック・ロンドンのうまいところだ。「一生つづくように思えた」数分後、外で猫の悲鳴と「一丁あがり！」(23)というフレッドの威勢のいい声が聞こえてくる。単調になりがちな幽霊話に例のブラックユーモアが入り、読者はほっと一息つけるのである。事実、幽霊屋敷のふたりを、海底から海面に上がって新鮮な空気を吸うダイバーにたとえている。が、「金縛りは解けなかった」(23)。しかも、持参した爆竹を投げても効果はない。

ついに幽霊の登場となる。ここでも読者の意表をつく現われ方をする。「超自然的な恐怖はすべて消えてなくなったように思われた」(24)。代わりに、チェスをしたいという強烈な欲求に襲われる。物語は予想外の展開となる。ダモンとピュティアスはチェスに没頭し、名勝負を繰り広げる。負けがわかるとダモンはピュティアスに襲いかかり、両手で首を絞める。と、そこで、駆けつけた警官が止めに入る。最後は、この謎の行為の説明で読者を納得させる。昔、この屋敷で殺人事件があった。バーチャル氏が、財産をだましとった甥と、残った屋敷を賭けてチェスを始めたが、負けを悟り、甥を絞め殺したという。要するに、幽霊屋敷に来たふたりは知らずに憑依され、過去の殺人事件を再現させられていたのである。

「幽霊なんて信じるか！」は、読者をいかに喜ばせるか、様々な工夫を凝らしている技巧的な作品といえる。しかし、作者と霊の関係は意外に深刻である。ジャック・ロンドンは幼いころ、霊媒の母が幽霊に憑依される姿を目撃していた。「幽霊なんて信じるか！」にはその体験と知識が活かされている。しかも、物語の結末は、題名にもかかわらず幽霊の存在を認めている。一体、どう考えたらいいのだろう。確かなのは、ロンドンが憑依という科学では説明のつかない現象に関心を抱いていた事実だ。母親の信奉していた心霊主義がまったくのでたらめとは思えなかったのだ。¹⁶⁾ 次の作品では霊媒も登場し、霊の存在をめぐる恐怖にもっと真剣に取り組むことになる。

2. 「こっくり板」（1906）——幽霊と潜在意識——

“Planchette”は戦前に大江専一が「占板」の題で訳し、春陽堂世界名作文庫の1冊『月状顔他七編』の中でわが国に紹介済みだが、有馬容子が2008年に新訳を発表するまですっかり忘れられていた感がある。出だしが冗長で繰り返が多いことが原因かもしれない。「お訊きするのはわたしの権利です」（1035¹⁷⁾）で始まる、リュートと質問に答えようとしないクリスの煮えきらない会話を理解することができれば、恐ろしい結末が待つこの隠れた傑作を堪能することができるはずだ。まずは、優柔不断なクリスの返事を見ておこう。「僕はあなたを自分のものにするためにはあらゆるものを惜しみません。でも、あなたと結婚することはできません」（1036）。クリスはリュートを誰よりも愛しているが、結婚はできないと言いづける。ふたりは4年前に出会った。リュートは音楽の留学を中止し、つきあっていた恋人とも別れ、クリスとの結婚を望んでいる。育ての親であるおば夫婦もそうなることを願っているが、なぜかクリスは結婚を避けている。したがって、リュートは同じ問いを繰り返さざるをえない。「わたしたちがなぜ結婚できないのか、わたしは理由を知りたいのです」、「だけどわたしたちは結婚できないのね。忘れてたわ。でも、なぜできないのか言ってください」（1039）。クリスはなぜか説明しない。このようにクリスが結婚できない理由は物語の大きな謎として提示されているが、あきれたことに、この謎は謎のまま衝撃的なクリスの死によって放置される。いわば、作者が説明を放棄したかっこうで、その異色ぶりに一般読者のほとんどは戸惑うか、不満をおぼえることになる。（が、後述するが、こうした不満は結婚してもらえなかったリュートがいちばん感じていたはずで、物語の意外な解釈が可能になってゆくのである。）

とりあえず、愛するリュートとクリスが結婚できない理由をテキストの外から説明しておこう。「こっくり板」はジャック・ロンドンの自伝的作品なのである。題材を提案したのは二番目のロンドン夫人となったチャーミアンだった¹⁸⁾。音楽の才能があり、おば夫婦に育てられた彼女がリュートのモデルである。誰からも好かれるクリスはロンドンの自画像だ。——1900年3月、ロンドンとチャーミアンと初めて出会ったが、4月にベス・マダーンと結婚。1903年、チャーミアンと恋愛関係に陥る。ロンドンはこのまま彼女を愛人にしておきたかったが、チャーミアンは正式の結婚を望んだ。1904年、妻のもとを去り、「こっくり板」の舞台であるグレン・エレンの山荘でチャーミアンと暮らしはじめる。——4年前に出会ってお互い愛し合っているのに結婚できない物語設定は、作者の愛人関係を反映しているのである。幸い現実では、1905年11月にベスとの離婚が成立し、ふたりは結婚できたのだが、物語のほうでは宙ぶらりんの状態がつづいたと仮定して空想を膨らませていったようだ。

「こっくり板」の心霊ホラー場面を見てゆくことにしよう。チャーミアンとの山での乗馬体験を下敷きにしているが、以下はフィクションである。——クリスはリュートの勧めで彼女の自慢の愛馬ドリーに乗り、リュートとの競走に勝つ。ゴールまでの息もつかせぬ迫力ある描写のあと、ふたりのくつろいだ会話が始まり、読者の緊張も解けたところで、唐突に恐怖の場面を入れるのは、「幽霊なんて信じるか！」ですぐに見たジャック・ロンドンならではのテクニクだ。ドリ

ーは狂ったように前脚を高く上げ、クリスを振り落とそうとする。馬の目の描写が怖い。「盲人的な野性の凶暴に燃えたドリーの目玉は飛び出さんばかりに大きくなり、白目の赤味があった部分がなくなって、鈍色の大理石のようになったが、それでいて内面が燃えさかっている恐ろしい表情」(1044)を見せる。クリスは落馬を逃れるものの、「リュートはそのとき初めて本当に心配になった」(1045)とあるとおり、ここからが恐怖の本題となる。すさまじい暴走の描写がつづき、なんとか無事だったクリスは、馬がわざと自分を落とそうとしたと告白。「あれは悪魔だった」(1046)と言う。そして愛馬の異常行動を初めて見たリュートは「取り憑かれたのかも」(1047)と述べる。「幽霊なんて信じるか！」で扱った霊の憑依がほめかされるのである。ここでふたりは笑う。「健全な意思をもった正常な20世紀の人間」(1047)は「迷信」(1047)など信じていないからだ。かくして、幽霊と科学の対決が再び語られることになる。

クリスが次に乗る彼自身の馬ワショー・バンは、ジャック・ロンドンが『黒猫』誌から得た原稿料でチャーミアンがこの作者のために買った馬²⁰⁾と同名である。フィクションとはいえ、この物語世界が作者と密接につながっていることがわかる。リュートがドリーよりも安全と判断してクリスは乗り慣れたこの馬にまたがるのだが、またしても異変が起こる。ワショー・バンは険しい山道から墜落して致命傷を負うのだ。かろうじて難を逃れたクリスは言う。「あれは故意にやったのです。何の予告もありませんでした。バンは故意に崖から落ちたのです」(1050)。クライマックスの伏線にもなっているこの場面で、読者は、偶然では説明できない超自然的な力をクリスとともに感じざるをえなくなってくる。

ここで題名にもなっているプランシエット、すなわち「こっくり板」が小道具として登場する。三角形の板に2つの脚輪と鉛筆がついたもので、下に紙を置き、板の上に手をのせて霊からの通信を待つ。「昔流行した」(1051)とは、ジャック・ロンドンの母が霊媒として活躍した19世紀末の心霊ブームをさすのだろう。²¹⁾こっくり板は、亡くなった家族や友人のメッセージを書きとるために使われた。興味深いことに、クリスたちが行なう交霊会を仕切るグラントリー夫人は陰気で小柄なところから、作者の母フローラをモデルにしたと推測できる。²²⁾ジャック・ロンドンが子供時代に垣間見ていた交霊会は、はたしてどのように再現されるのだろうか。

グラントリー夫人以外は遊び半分で本気にしていないのは、読者を油断させるおなじみの手法だ。資本家のバートンはこっくり板に手をおいたまま10分間も立ち尽くすが、何も起こらず、参加者たちは爆笑。が、代わったロバートおじさんは鉛筆が動き出して驚く。「こいつは不思議だ。これを見たまえ。わしがやってるんじゃないぞ。わしの手がひとりで動いているんだ」(1055)。この驚きの言葉でいよいよ恐怖の場面に入ってゆくとおぼせて、記されていたものが新聞の株式相場であったというオチをつける。「アイロントップはずいぶん下がったものだな」と思わず感想を述べるバートンと、「ロバート、あなた、また株をやってるのね！」(1056)と責めるミルドレッドおばさんに、読者は笑い、緊張を解かれる。しかし、これはこっくり板が人の潜在意識を映す証拠となり、後述する物語の別解釈につながっていく。とはいえ、この作品はあくまでも幽霊の恐怖がメインに描かれる。「潜在意識が書かせた」(1056)と言ったクリス自身が、怒った霊の警告を書き取ってしまうからである。グラントリー夫人は道化になるどころか、見事な進行役としてメッセージの内容を伝える。

「では読みますよ。最初に、大きな文字で『用心！ 用心！ 用心！』と3度書いてあります。あとの文字は小さく、こう書いています。『クリス・ダンパーよ、私はきさまを殺すつもりだ。すでに2度殺そうとしたが、失敗した。今度は成功するはずだ。まちががなく殺してやるから、そのつもりでいる。殺す理由を言う必要はあるまい。自分の胸に訊け。きさまがしようとしている悪事は——』ここで急に終わっています」（1057）

クリスは眠気に襲われトランス状態にいる。馬の事故のことは忘れていて、グラントリー夫人とリュートが警告だと解釈する。しかも、第三者のグラントリー夫人がこっくり板に「あなたはだれです？」と問うと、クリスが書き取ったのと同じ筆跡で「ディック・カーチス」と返事がかえってくる。リュートの亡き父親の名前である。「今は20世紀の世の中ですぞ」（1058）と抗議していたロバートおじさんも、その字を見るなり、「これはディックの筆跡だ。わしは千人の中でもディックの筆跡は見分けがつく」（1058）と証言。このあとには、リュートの母の霊も登場し、読者はリュート同様、「目に見えないものに対する本能的恐怖」（1061）にぞっとさせられる。そして、クリスは潜在意識説で反論したものの、幽霊の恐ろしい警告どおり、無残に殺されることになる。

手際よく参加者に指示を出し、見事、こっくり板に霊を呼び出したグラントリー夫人の自信に満ちた様子を見ると、唯物主義者のジャック・ロンドンが霊媒の母を決して見下してはいなかったことが理解できる。不思議な心霊現象も否定はしていない。しかし、「こっくり板」は単に幽霊の恐怖を描いた物語ではなかった。科学的解釈の余地も残しているのだ。交霊会の最後、こっくり板に手をおくリュートに注目したい。なぜか父親の霊は登場せず、代わりに亡き母マーサが現われ、夫は怒っているが愛を貫きなさいと助言する。よく考えると、このリュートがあやしいのである。彼女はクリスのように眠くならなかった。クリスが結婚してくれないことに不満をもっており、馬の事故にはかならず居合わせた。ドリーに乗せたのも、ワショー・バンに乗るよう勧めたのも、彼女だった。リュートなら父親の筆跡を知っていただろう。彼女の潜在意識がまわりのものに暗示を与えたとも考えられるのだ。「彼女は、会ったことのない軍人だった父親についてあれこれ想像した少女時代を思い出していた」（1059）。想像上の父親像は「勇敢で短気で激情的」（1059）で、警告文と一致する。リュートは意識の上ではクリスを熱愛しているが、潜在意識においては、父が象徴する怒りと母が象徴する愛のあいだで揺れ動いていたのかもしれない。ちなみにクリスは、こっくり板に現われた母親をリュートの潜在意識が投影されたものと見なし、「人間が死んだら、死んだのです。灰になるんです」（1064）と作者のジャック・ロンドン自身が常々口にしてきた言葉を言う。

しかし、この主張をあざ笑うかのようにこっくり板には、クリス自身の手によって怒れる霊の警告が再び記されることになる。「こっくり板」のぞっとさせられる場面である。「逃れることはできないぞ。きさまは当然の報いを受けるのだ！」（1065）。予言の成就が物語のクライマックスとなる。リュートのもとを去らなければならないと言ったクリスに、「あなたが二度と帰ってこないなんて言う、まるで死に別れるみたい」（1066）とリュートは不吉なことを言う。自分を捨てるなら死んでしまえと潜在意識で願っているのではないか。それとも、娘をもてあそんで逃げようとする男を怒り狂う父親の霊が追撃するのだろうか。3頭目の「とても脚のしっかりした、

賢い馬」(1067) コマンチは突然卒倒し、クリスを道づれに、崖上から落ちてゆく。「彼女の目は、父親の幽霊がコマンチに痛打を食わせる幻影を見た」(1071)と、リュートの視点から描かれる。

「しばらく静かにしてくれれば」と、リュートは太いため息をついて、救助の方法をしきりに考えた。

しかし、コマンチは再び暴れはじめた。リュートはそれを見て、父親が手綱を取って引きずり落とす幻想を抱いた。(1071)

崖の途中に見えていたクリスの姿はこれで完全に消え去り、死は確実となる。物語は崖の上でただ待つことしかできないリュートを描き、終わる。暗澹たる結末である。

ジャック・ロンドンはこの「こっくり板」で何を言いたかったのか。上述したリュートの潜在意識の発動を、気づく人にだけわかるように書いたのか？ 幽霊が実在したかどうか論議の的になったヘンリー・ジェイムズの『ねじの回転』(*The Turn of the Screw*, 1898)と同種の趣向も感じられるが、超能力を扱っている点ではスティーヴン・キングの『キャリー』(*Carrie*, 1974)の先駆けと位置づけることもできる。²³⁾「幽霊なんて信じるか！」が幽霊屋敷を舞台とした古い怪談の伝統を受け継いでいるなら、「こっくり板」ははれっきとしたモダンホラーといえるだろう。しかし、物語中では靈魂を完全には否定していない。科学では説明のつかない恐ろしい現象が事実として描かれている。いずれの解釈も成り立ち、得体の知れぬ恐怖が一種の不快感として読後に残る。ちなみに、リュートの父はキャプテン・リチャード・カーチスだったが、モデルのチャーミアンの父親はキャプテン・ウィラード・キトリッジといい、同じ「大尉」の肩書きをもつ軍人だった。じつの父親に認知されなかったジャック・ロンドンがチャーミアンの父の幽霊を恐れていた可能性もあるのだ。

3. 「死後も消えぬ姿」(1911)——死後も生きつづけるかもしれないという恐怖——

「幽霊なんて信じるか！」と「こっくり板」を分析してわかったことは、ジャック・ロンドンが唯物主義者でありながら、目に見えぬ未知の世界に関心と畏怖を抱いていたという事実だ。だからこそ、人間の根源的恐怖を描き、読者を怖がらせることができたのだ。「こっくり板」では、潜在意識という当時最新の科学を用いても幽霊の恐怖は消えなかった。ジャック・ロンドンの最後のホラー短編小説「死後も消えぬ姿」はどうであろうか。

原題の“Eternity of Forms”は直訳すると「姿かたちの永久不滅」。死後もいまの姿で生きつづけるだろうと主張する兄と、主人公が議論したテーマである。すでに見た2作品同様、死後の世界と幽霊の存在が興味の中心になっている。チャーミアン・ロンドンは、主人公がホプス、ベーコン、ロック、カント、ラプラスを援用して死後の世界を完全否定した箇所がジャック・ロンドン自身の信念だったと指摘し、その証拠として死の2年前に書いた手紙文を紹介している。「僕は、始末に負えない唯物主義者だ。(中略)自分が死ぬときには文字通り死ぬものと信じる。最近、叩きつぶした蚊とまったく同じように、この世から消えうせるものと信じる²⁴⁾」。しかし、

この言葉をそのまま信用することはできない。これと呼応する、「人間が死んだら、死んだので。灰になるんです」と言った「こっくり板」のクリスは、超自然的な力の前ではあまりにも無力だった。同様に「死後も消えぬ姿」の中で死後の世界を論理的に否定した作者の分身も、死ぬまで幽霊に悩まされることになるのだ。

この作品は、セドリー・クレイデンが椅子の上で2年間暮らしたのち亡くなり、この奇行は兄ジェイムズの謎の失踪と関係があるらしいと伝える新聞記事から始まる。本編はセドリーの書いた手記で、自ら奇怪な体験を語る。セドリーは兄ジェイムズを殺して地下室に埋めていた。最初は、兄の失踪を嘆き、ずっと仲がよかったと書いているが、やがて、真相を告白する。兄弟の緊迫した会話から殺人に至る回想は、肝心の記憶が脱落しているぶん主人公の興奮と衝撃をリアルに伝え、読み応えがある。

その夜、兄にはとくにイライラさせられた。私の全神経は悲鳴をあげていた。兄は、人間の魂はそれ自体永遠の姿をもち、脳内の光は永遠不滅だと主張していた。私は火かき棒を手にとった。

「仮に、」と私は言った。「これで兄さんを殴り殺したらどうなる？」

「ぼくは存在しつづけるよ」兄が答えた。

「意識をもった実体としてか？」私が訊く。

「そうだ。意識をもった実体として」と兄が答える。「ぼくは、より高い次元へ移動するはずだ。この世の人生はもちろん、おまえのことも、この議論自体もおぼえていて、そう、存在したまま、おまえとこの議論をつづけるだろう」

単なる議論だった。誓って言う。単なる議論だった。私は絶対に手を上げなかった。そんなことはできるはずがない。相手は私の兄、ジム兄さんなのだから。

どうも思い出せない。私はとてもいらついていた。兄は、この形而上学的信念については、いつでも強情すぎた。はっと気づくと、兄は暖炉の前に倒れていた。血が流れていた。恐ろしい光景だった。(1756-1757²⁵⁾)

以後、語り手の「私」は椅子の上に出現する兄の幽霊におびえつづける。「妄想」「空想の産物」(1757)と否定しようとするが、その姿を消すことはしだいに困難になり、ついにはこう書く。「兄は正しかった。目に見えぬ世界は存在する。私はそれを見ているのではないか」(1759)。こうして、兄の幽霊を避けるために椅子での生活を始める。手記の最後は「もう彼は来ない。姿かたちが永遠につづくことはない。私はそのことを証明した」と一見、唯物主義の立場を取り戻したように見えるが、「でも、私はこの椅子を離れるつもりはない。離れたあとが怖いからだ」と結ばれている。

語り手を狂人と考えれば、「こっくり板」の潜在意識のように科学的に納得することもできよう。しかし、それでも恐怖は残る。セドリーは当初自分の妄想と考えていたが、幽霊の存在を以前のように否定することができなくなった。ひょっとしたら、死後の世界はあるのではないか。その否定しきれない可能性がセドリーには怖いのだ。この主人公が作者の分身であることは確認済みだ。ということは、ジャック・ロンドン自身、死後の世界が怖かったのではないか。チャー

ミアンが引いた先の手紙の中で、ロンドンが死で人生は終わると唯物論を主張する一方、「抽象理論に基づく哲学者たちには我慢がならない」と怒っている。形相の永久不滅説にセドリーが激怒したのと同じである。そもそもなぜ怒らなければならないのか。なぜ笑い飛ばすことができなかったのか。物語では、死後も生きつづけると言った兄を殺してしまうほどの怒り様だった。

答えは、ジャック・ロンドンがリアリズム作品においては常に「死」を「決して裏切らない最終の安らぎ²⁶⁾」として描いていたことから想像がつく。過酷な人生のあとには安らかな眠りが待っているとロンドンは信じていた。自伝的小説『マーティン・イーデン』(Martin Eden, 1909)では主人公に自殺させているほどである。が、逆を返すと、死後の世界を恐れていたと言い換えることもできる。もし死が裏切り、安らかなものでなかったとしたら？ ジャック・ロンドンのような人にとって、これほど恐ろしいことはあるまい。特に晩年は体力が落ち、病気に悩まされていた。腎臓を悪くし、苦痛との戦いだった。だから死は安らぎでなければならなかったのだ。死後の世界をほめかすものに過剰に反応したのはそのためだろう。「死後も消えぬ姿」の主人公セドリーは「死後も消えぬ姿のことなんか、何も聞かなければよかったのだ」(1760)と後悔しているが、ジャック・ロンドン自身、子供のころ見た母親の交霊会を思い出し、死んだあとの自分がどうなるのかひそかにおびえていたのではあるまいか。

む す び

以上、ジャック・ロンドンの心霊ホラー小説3編を見てきた。それぞれユニークな作品であることははっきりしただろう。作家デビュー前の「幽霊なんて信じるか！」は幽霊屋敷を舞台としたヴィクトリア朝に人気のあった怪談の伝統に連なりつつ、ブラックユーモアやポーへのオマージュを交え、才気あふれる物語に仕上がっている。豊富な読書量と、霊媒であった母から得た幽霊の知識が、はやくも結実しているのを見ることができた。2作目の「こっくり板」では母親をモデルにしたと思われる霊媒が登場し、こっくり板を使った交霊会の恐怖がリアルに描かれていた。はたして幽霊は実在するのか？ 前作の陽気な問いは深刻さを増し、潜在意識説を提示しつつも、荒れ狂う幽霊の警告と復讐が生々しく描かれ、死後の問題は保留され、不気味な読後感が残った。最後の「死後も消えぬ姿」は、作者の唯物主義を代弁する主人公が結局は当初の自信を失い、死後の世界が存在するかもしれないという可能性におびえる話だった。これは、死を安らぎと見なしていたジャック・ロンドンが自分の内なる恐怖を吐露した作品である。その正直さゆえに、この作品の恐怖は本物だ。いま読んででもじゅうぶんに怖い、現代に通用する心霊ホラーであると総括したい。

なお、腎臓機能不全による尿毒症に悩まされていたジャック・ロンドンは、1916年11月22日に亡くなった。自殺といわれている²⁷⁾。死後の恐怖よりも現実の痛みに耐えられず、結局、死に安らぎを期待したのだろう。はたして死はすべての終わりとなったのか？ 最後に蛇足を承知で、驚くべき後日談を紹介しよう。1925年、チャーミアン・ロンドンの母代わりだったニネットおばさん（「こっくり板」のミルドレッドおばさんのモデル）が、心霊学の権威になっていたコナン・ドイルのお墨つきをもらい、前年に亡くなった夫エドワード・バイロン・ペインの遺稿『ジャック・ロ

ンドンの『霊魂』を出版した。マーガレット・モア・オリヴァーという若い霊媒の協力を得て、ペイン夫妻が行なったジャック・ロンドンの霊との交信を記した奇書である。この中でロンドン²⁸⁾は「僕はいま霊魂だ、生ける霊魂だ！」(87)と宣言し、「物質のみが破壊できる。生命、霊、魂、精神、理性——これらのものは永遠不滅だ」(89)と生前主張しつづけた唯物論がまちがっていたことを認める。彼は現世の自分が邪悪だったと反省し(120)、「僕は先に進みつづけなければならない！」(122)という言葉を残して交信を終える。著者のペインはこれを「道徳的存在に生まれ変わることを語っているのだ」(123)と解説している。

チャーミアン・ロンドンは、交霊に夢中になったおば夫婦に批判的で、この本の出版には最初から反対した。「霊からのメッセージとは、すべて潜在意識がはたらいたもの²⁹⁾」というのがこの未亡人の不動の信念だった。本稿で見た「こっくり板」の議論が思い出される。作者ジャック・ロンドンの分身だったクリスと同じスタンスだ。しかし、「さすがはロンドン夫人」と褒める気にはなれないだろう。すでに本論で結論したように、ロンドンは死後の世界の存在を否定しきれなかったからである。したがって、「私が直接知っていたジャック・ロンドンは本質的に、骨の髄まで観念論者だった」(62)というエドワード・バイロン・ペインの証言は単純に嘘と片づけることはできない。ジャック・ロンドンの死後のメッセージは、交霊会を開いた当事者の潜在意識を反映したものかもしれないが、本物である可能性もゼロではない。こうした観点から読むと、『ジャック・ロンドンの霊魂』は非常に恐ろしい本だ。ペイン夫妻やコナン・ドイルにとっては、死が人生の終わりでないことは大いなる希望であり、ジャック・ロンドンの霊との交信は福音そのものであったが、本稿で扱った3編の心霊ホラー小説を読んだあとでは、『ジャック・ロンドンの霊魂』はホラー以外の何ものでもない。死後の恐怖を作品化した作家本人が「幽霊」になってしまったというのだ。「幽霊なんて信じるか!」「こっくり板」「死後も消えぬ姿」の幽霊たちにわが身を重ねれば、この恐怖はある程度想像できよう。われわれは幽霊として死後も生きつづけなければならないのだろうか。ジャック・ロンドンが心霊ホラー小説で明かした不安は、いまやわれわれの不安となった。もし死後も意識があれば、ジャック・ロンドンはすでに真相を知ったことになる。次はわれわれの番だ。ひょっとしたら、いつの日か、恐ろしい真実に直面することになるかもしれない。

注

- 1) 辻井栄滋『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く』（丹精社、2001年）115頁。
- 2) ジャック・ロンドン『試合——ボクシング小説集』辻井栄滋訳（社会思想社、1987年）、『アメリカ残酷物語』辻井栄滋・森孝晴共訳（新樹社、1999年）を参照。
- 3) 「幽霊なんて信じるか!」「死後も消えぬ姿」の全訳は、横山孝一「ジャック・ロンドンの心霊ホラー二編——「幽霊なんて信じるか!」と「死後も消えぬ姿」（翻訳）」『群馬高専レビュー』第27号（2009年、3月）一—十四頁を参照。なお、「死後も消えぬ姿」は、「椅子で暮らした男」の題名で風間賢二が『ヴィクトリア朝空想科学小説』（ちくま文庫、1994年）に訳している。「こっくり板」は、大江専一が「占板」の題で戦前に全訳を発表。収録した『月状面 外七篇』は復刻版（ゆまに書房、2004年）が出ている。有馬容子による新訳「コックリ占い板」は『ジャック・ロンドン幻想短編傑作集』（彩流社、2008年）で読むことができる。
- 4) 中田幸子『ジャック・ロンドンとその周辺』（北星堂書店、昭和56年）47頁。
- 5) Jack London, "Who Believes in Ghosts!" *The Complete Short Stories of Jack London*, I. Eds.

- Earle Labor, Robert C. Leitz, III, and I. Milo Shepard. 3 vols. (Stanford: Stanford UP, 1993) 以下、カッコ内にページ数のみを記す。拙訳。
- 6) ブラックユーモアをジャック・ロンドンの文学の特色の1つと考える研究者もいる。Dennis E. Hensley, "A Note on Jack London's Use of Black Humor." *Jack London Newsletter*, vol. 8, no. 3 (September-December, 1975): 110-113.
 - 7) 1895年当時、オークランド・ハイスクールの授業を受けていたジャック・ロンドンについては、Georgia Loring Bamford, *The Mystery of Jack London* (Oakland: The Piedmont Press, 1931) 15-24を参照。学校では、文学的才能よりもみずぼらしい身なりのほうが印象的だったようだ。
 - 8) 少年時代にオークランド公立図書館を発見したことが多読のきっかけとなった。「手に触れられるものなら何でも、主として歴史や冒険物を、それに古い旅行記や航海物をことごとく読んだ。朝、昼、夜の区別がなかった。ベッドやテーブルで読んだかと思えば、学校の行き帰り、それに、他の少年たちが遊んでいる休み時間にも読んだのだった」。ラス・キングマン『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家——写真版ジャック・ロンドンの生涯』辻井栄滋訳(本の友社, 1989年) 46頁。
 - 9) 「不可解な火事」のあと出現する猫は、主人公にとって「ブルトーの幽霊であり復讐をしに帰ってきた死霊である」。水田宗子『エドガー・アラン・ポオの世界——罪と夢』(南雲堂, 1982年) 121-122頁。ポーは、人間にしか魂を認めないキリスト教の世界観とは異なり、すべての物質・肉体は精神・靈魂に変容すると信じていた。野口啓子「ポーの『ユリイカ』——膨張するアメリカ/収縮する宇宙」『アメリカ文学研究』第41号(日本アメリカ文学会, 2005年2月) 4-6頁参照。
 - 10) 辻井栄滋『二十世紀最大のロングセラー作家——ジャック・ロンドンって何者?』(丹精社, 2005年) 17頁。「千度もの死」を掲載した『黒猫』誌の表紙を写真で見ることができる。
 - 11) Alex Kershaw, *Jack London: A Life* (New York: St. Martin's Press, 1998) 240.
 - 12) Earle Labor and Jeanne Campbell Reesman, *Jack London* (New York: Twayne, 1994) 67, 70.
 - 13) ロジャー・コーマン監督のオムニバス映画『黒猫の怨霊』(*Tales of Terror*, 1962)を見れば、モダンホラーの代表的作家スティーヴン・キングが尊敬するリチャード・マシスンが脚本を担当しており、現代につづくホラー・ジャンルの人気に貢献したポーの不動の地位が確認できる。特に「モレラ」("Morella," 1835)原作の「怪異ミイラの恐怖」と、「ヴァルデマール氏の病症の真相」("The Facts in the Case of M. Valdemar," 1845)に「催眠術の啓示」("Mesmeric Revelation," 1844)を加えた「人妻を眠らす妖術」は、通俗的かつ大胆に脚色されているものの、リアルな霊界小説『奇蹟の輝き』(*What Dreams May Come*, 1978)を書くことになるマシスンが、心霊ホラーの核心を見事にとらえている。霊が生者にとってかわる前者は「幽霊なんて信じるか!」とまさに同じ趣向だ。臨終まぎわの男に催眠術をかけて死後の世界を語る後者では、このあと本文で論じるジャック・ロンドンの「こっくり板」「死後も消えぬ姿」と同種の恐怖が味わえる。
 - 14) ジャック・ロンドンが書いたジョージの警告の前半はいわゆる騒霊現象で、スティーヴン・スピルバーグ製作の『ポルターガイスト』が特殊効果を用いてリアルに映像化した。フリーリング家に現われた霊たちは最初、家具を動かすなどのいたずらをするだけだったが、主人公のキャロル・アンをめぐる凶暴化し、家族を恐怖に陥れる。ジョージの警告の後半は憑依現象で、ウィリアム・フリードキン監督が『エクソシスト』でその恐ろしさを存分に描いた。悪霊に取り憑かれたリーガンの形相と態度は見るものを圧倒するほどずさまじい。体内で苦しむリーガン本人の人格は、腹部に"Help me"と文字を浮かび上がらせて助けを求め。「幽霊なんて信じるか!」はこの憑依現象を扱っており、ダモンとピュティアスにたいする警告は、物語の恐ろしいクライマックスに向けた伏線になっている。
 - 15) Lafcadio Hearn, "The Value of the Supernatural in Fiction." *Interpretations of Literature*. Ed. John Erskine. 2 vols. (1915; Port Washington: Kennikat, 1965) II, 94.
 - 16) ジャック・ロンドンは6歳のとき、母フローラの交霊会で、すわらされたテーブルが宙に浮くのを体験している。フローラはネイティブ・アメリカンの支配霊に憑依され、悲鳴や雄叫びをあげ、近所

- の子供たちのあいだでロンドン家は「幽霊屋敷」と呼ばれていた。Andrew Sinclair, *Jack: A Biography of Jack London* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1978) 4.
- 17) Jack London, "Planchette." *The Complete Short Stories of Jack London*, III.
以下、カッコ内にページ数のみを記す。訳文は、古めかしい箇所を一部現代風に改めるなど大江専一訳を自由に活用させていただいた。
- 18) Andrew Sinclair, 119. ジャック・ロンドンの当時の心理状態を示している作品という。
- 19) Charmian London, *The Book of Jack London*. 2 vols. (New York: The Century, 1921) II, 56.
- 20) Charmian London, II, 37, 39.
- 21) Rebecca Stefoff, *Jack London: An American Original* (Oxford UP, 2002) 13 参照。
- 22) マクリントックも同意見だ。James I. McClintock, *White Logic: Jack London's Short Stories* (Cedar Springs, Michigan: Wolf House Books, 1975) 144. なお、フローラが小柄だったのは、少女時代にかかった腸チフスのせいで成長が止まってしまったからである。この劣等感から性格が変わってしまったことはじゅうぶん同情できる。Clarice Stasz, *Jack London's Women* (Amherst: U of Massachusetts P, 2001) 6を参照。
- 23) 『ねじの回転』の読解では、フロイトを援用したエドモンド・ウィルソンを筆頭に、物語中の幽霊を語り手の家庭教師の幻覚とする説が幅をきかせている。「こっくり板」に当てはめると、引用文で示したように、まさしく視点人物のリュートが幽霊を幻視している。『ねじの回転』を総括すると、オールドリッチが指摘するとおり、幽霊が実在したか否かはともに十分な証拠があり、おそらく決着はつかない。純粹な怪談ととるか精神医学の症例ととるかは読者の気質にもよる (C. Knight Aldrich, M. D., "Another Twist to *The Turn of the Screw*." *A Casebook on Henry James's "The Turn of the Screw*." 2nd edition. Ed. Gerald Willen. New York: Thomas Y. Crowell, 1969. 367.). 同様のことが「こっくり板」についても言えるだろう。しかし、あえて幻覚説をとるならば、恋人に結婚してもらえないリュートの苦悩は、『ねじの回転』の家庭教師の性的抑圧に対応する。そして、その抑圧されたエネルギーは神経症の妄想にとどまらない。ステイーヴン・キングの処女作『キャリアー』の主人公が、狂信的な母親に抑圧されていた女性のからだを月経で初めて意識し、念動力と念力放火力を発動させたように (Douglas E. Winter, *Stephen King: The Art of Darkness*. Signet, 1986. 32-33.), リュートは馬を超能力で突き動かし、煮えきらぬクリスを死に追いやるのだ。幽霊に遭遇する女性の心理に着目したジェイムズをさらに発展させ、説得力を持って超能力をリアルに描いたキング。アメリカのホラー文学史上、ジャック・ロンドンはその間に立つ作家といえる。
- 24) Charmian London, II, 363.
- 25) Jack London, "The Eternity of Forms." *The Complete Short Stories of Jack London*, III. 以下、カッコ内にページ数のみを記す。拙訳。
- 26) 中田幸子, 367頁。
- 27) 自殺説は、ジャック・ロンドンに仕えた日本人使用人・関根時之助の証言によっても裏づけられている。辻井栄滋『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く』285-287頁参照。
- 28) Edward Biron Payne, *The Soul of Jack London* (London: Rider & Co., 1925) 以下、カッコ内にページ数のみを記す。拙訳。なお、この本の巻末には、マーガレット・モア・オリヴァー自身が書いたペイン夫人宛の手紙が収録されている。ジャック・ロンドンの霊を呼び出し、自動筆記で親しく交信できるようになった経緯が詳しく述べられている。
- 29) Clarice Stasz, 256.